復活節第 4 主日　ヨハネ10章11―16節

［直訳］

11 私は　ある　良い羊飼いで。
　良い羊飼いは　彼の命を　置く　羊のために。

12 雇われ人　そして　羊飼いでない者は、
　　そのものに　自分の羊が属さない、
　見る　狼が　来るのを
　そして　残す　羊を
　そして　逃げる、
　――そして　狼は　奪う　それらを
　　そして　散らす。――

13 というのは　雇われ人で　彼はある、
　そして　彼の気がかりではない　羊に関して。

14 私は　ある　良い羊飼いで、
　そして　私は知る　私のものを
　そして　知る　私を　私のものは、

15 ように　知る　私を　父が
　私も　知る　父を、
　そして　私の命を　私は置く　羊のために。

16 そして　他の羊を　私は持つ
　　そのものは　この囲いからのものではない。
　それらをも　私は導かねばならない
　そして　私の声に　彼らは聞くであろう
　そして　彼らはなるであろう　一つの群れに、
　ひとりの羊飼い。

17 このことのゆえに　私を　父は　愛する、
　というのは　私は　置く　私の命を
　ようにと　再び　私が取る　それを。

18 誰も取り去らない　それを　私から、
　　むしろ　私は　置く　それを　自分から。
　力を　私は持つ　それを置くことの、
　そして　力を　私は持つ　再び　それを取ることの。
この掟を　私は取った　私の父から。

a　b　c　b'　a'

［新共同訳］

11わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い、また追い散らす。――13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。（17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」）

①文脈

ⓐ9章1―34節

イエスは生まれつき目の見えない人を癒す。癒された人は、イエスは預言者であり、神のもとから来たのでなければ、何もできなかったはずだ、と答える。すると、ユダヤ人たちは彼を外に追い出す。

ⓑ9章35―41節

イエスは彼に出会うと「あなたは人の子を信じるか」と尋ね、「あなたは、もうその人を見ている」と言う。彼が「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」と言う。ファリサイ派の人々に、イエスは「今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」と言う。

ⓒ10章1―42節

ファリサイ派の人々にイエスは、「羊の囲い」のたとえを話すが、彼らは何のことか分からなかった。さらに、イエスは自分が羊の門であり、良い羊飼いであると話す。この話を巡って、ユダヤ人の間にまた対立が生じる。ユダヤ人はイエスが神を冒瀆したと言って、石で打ち殺そうとするが、イエスは彼らの手を逃れる。

②構成

11―18節は一つのまとまりであり、14―15節を合わせ目とする二つの段落（11―15節と14―18節）からできている。

ⓐ11―15節

11節と14―15節が「私は良い羊飼いである」と「羊のために命を置く（捨てる）」で対応し、その間の12―13節は、狼を見ると羊を残して逃げ出す雇われ人の無責任さを述べている（「雇われ人」で囲い込まれている）。この段落の主題は雇われ人とは違って、羊のために命を差し出す良い羊飼いにある。14節二行目から15節二行目にかけて、「知る」が四回繰り返され、良い羊飼いが羊のために命を差し出す根拠や理由を明らかにしている。

ⓑ14―18節

「父」と「置く」によって、14―15節と17―18節は対応している。イエスは父との関わりにあるので、その関わりの中で、「命を置く」ことができる。16節ではイエスが命を差し出すのは「この囲いからのものではない、他の羊」のためでもあることが述べられる。17―18節の中心は、イエスが命を「自分から」捨てるのであって、誰かに取り去られるのではないと述べるcにある。自分から捨てるのは、再びそれを取ることができるからであり（bとb’）、それがイエスを愛する父の御旨であるからである（aとa’）。

③良い羊飼い（11―15節）

ⓐ11節と14―15節は「良い羊飼い」について述べ、その間の12―13節では「雇われ人」にすぎない羊飼いを描いている。両者を対比することによって、良い羊飼いの特徴が「命を置く」ことにあることが明確にされる。雇われ人が世話をする羊は、他人の羊であって、自分の羊ではない。雇われ人は狼が来ると羊を置いて逃げ出す。自分の命が大事だからである。しかし、良い羊飼いは羊のために自分の「命を置く」。良い羊飼いの「良さ」は、「羊のために」命を捨てることにある。

ⓑ「良い」と訳されているカロスは、新約聖書に101回の用例があり、その多くは福音書と牧会書簡に見られる。ヨハネ10章11・14節のように、人物に使われる用例は少なく、ほとんどは事物や事柄に使われる。「よい」と言っても、よさをどのような観点に基づいて評価するかによって、意味合いも変わってくる。

㋐美的な評価を表し、外見に使われ、「美しい」を意味する。神殿を飾るのは「美しい石」（ルカ二一5）。

㋑事物の優れた性質を表して「有用な・価値のある」を意味する。魚、木とその実、土地、種、ぶどう酒、真珠、塩のよさを表すのに使われている。

㋒倫理的なよさを表し、「善い・立派な・賞賛に値する」などの意味になる。この意味は、人が行う「業（行い）」の善さを表すのに多く使われる。「善い業」を行うのは、イエスに香油を注ぐベタニアの女や（マタ二六10と並行箇所）、イエス自身である（ヨハ一〇32）。弟子たちやキリスト者には「善い業」を行いなさいと勧告が行われる（マタ五16、1テモ五10、ヘブ一〇24など）。振る舞い、良心、評判などの善さにも使われるほか、パウロではしばしば単独で名詞的に使われ、「善いこと」の意味になる（ロマ七21、2コリ一三7、ガラ六9など）。

㋓特定のよさではなく、あらゆる点から見て卓越しており、欠点や非難の余地がないことを表す。ヨハネ10章の用例はこの意味である。カロスが表すのは、羊のために命を捨てる、羊飼いイエスのすばらしさである。その意味で、「良い羊飼い」であるイエスは唯一の羊飼いであり（16節）、羊飼いを自称する指導者や古代の牧羊神とは区別されることになる。

ⓒ14―15節には「知る」が四回繰り返されている。父なる神とイエスがお互いを「知る」ように、イエスと羊もお互いを「知る」。この「知る」は一方通行の知的な働きではない。人格的な相互の触れ合いにもとづく「知る」である。そのように羊を知る良い羊飼いは、雇われた羊飼いとは違って、羊の命に無関心ではいられない。

ⓓ雇われた羊飼いにはただの「羊」（13節）であるが、良い羊飼いには「私のもの」（14節）で

ある。このような人格的交わりに動かされて、良い羊飼いは「羊のために」命を置く。ヨハネ15章13節に「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」とあるように、「知る」という人格的触れ合いはおのずと愛へと高まってゆく。ここでの「知る」は熟してゆけば、愛となるような「知る」である。

ⓔ狼が来ると羊を置き去りにして逃げる雇い人にとって、羊のことは「彼の気がかりではない」（13節）。雇い人の姿と対照されて、良い羊飼いの姿が浮き彫りにされる。良い羊飼いは自分ではなく、羊の命を心にかけ、羊のために自分の命を捨てる。「誰かの関心事である・気にかかる」を意味する動詞の否定形をここに用いることによって、羊の命に無関心でいられない良い羊飼いの姿が、彼の羊への愛の深さがほのめかされている。

④父の御旨で（14―18節）

ⓐ14―15節と17―18節は「父」と「私は置く」で対応しており、この段落では父との関わりの中で「命を置く」ことが語られる。

ⓑ17―18節は、aとa’が対応し、その内側にbとb’が置かれ、中心のcを囲い込んでいる。このような構成から分かるように、イエスは強制的に命を奪われるのでなく、自ら進んで命を捨てる（c）。その理由が二つの方向から述べられている。第一に、父が私を愛しており、命を捨てることは父の「掟」、つまり意思だと知っているからである（a・’a）。第二に、命を捨てるのは、「再び取る」ことができると知っているからである（b・b’）。イエスの死と復活は神の御旨である。イエスは「父」との交わりの中で、「再び取る」という確かな希望に包まれて、自ら進んで十字架上に命を置く。

ⓒイエスは、父なる神との深い愛の交わりの中で命を置くことが14―15節と17―18節で述べられる。その間の16節では命を置く目的が語られていく。「この囲いのものからでない他の羊」とは異邦人を指す。彼らは「私の声に聞くだろう」し、「一つの群れになるであろう」。イエスが「命を置き」それを「再び取った」後には、異邦人も救いにあずかることになる。

⑤イエスが命を置くのは

ⓐ「命を置く（＝捨てる）」が繰り返されることから分かるように、イエスの死がテーマとなっている。イエスが羊のために「命を置く」のは、羊との間の深い交わりのためであり、それが父の御旨だからである。

ⓑ父とイエスの間には、深い豊かな交わりが広がっている。私たちは、良い羊飼いイエスを通して、この同じ交わりに包み込まれる。イエスが私たちのために十字架上に「命を置く」のは、この交わりへと招き入れるためである。イエスの贖いの業は「まだこの囲いに入ってはいない羊にも及んでいる。こうしてすべてのものが父と子の愛の交わりに生きることになる。

ⓒイエスは父の愛の内におり、父の御旨を知っており、また自分の羊を知っている。父を知り、羊を知るイエスは、羊と父との間を取りなすために自ら進んで命を置く。友のために命を捨てることの尊さを知るイエスは、羊を愛する良い羊飼いとして、自らのいのちを差し出す。私たちに差し出されたこのいのちにあずかることによって、父が与える真のいのちに無条件に組み込まれることになる。